

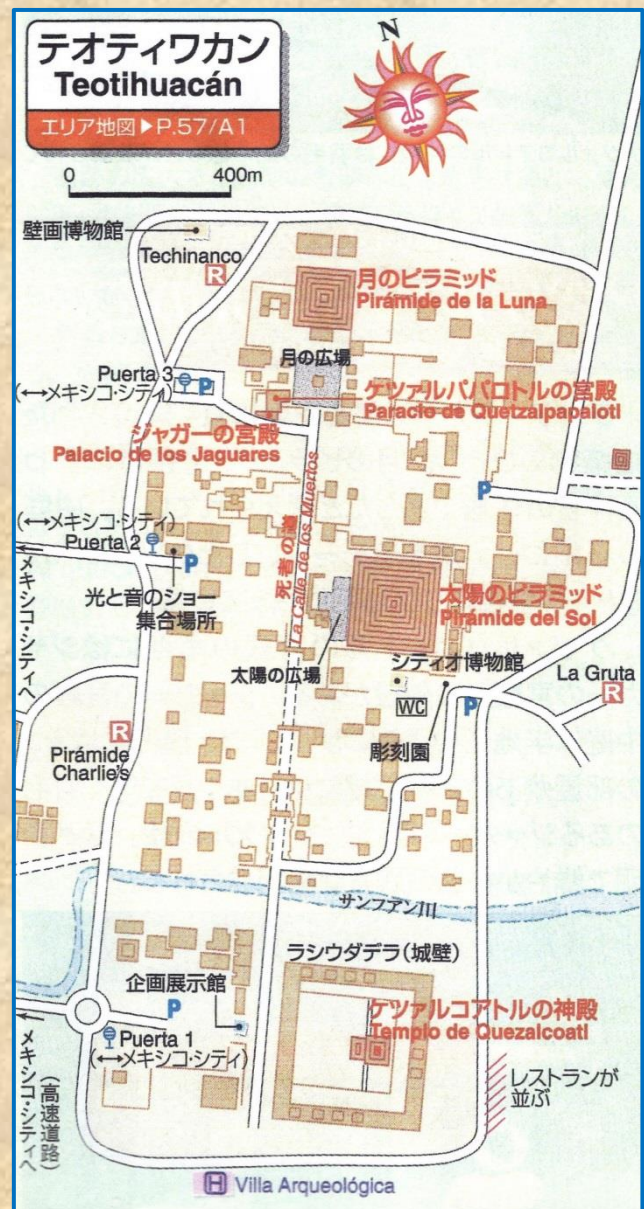
古代文明を訪ねて

古川 真人

春にアメリカの二大文明（マヤ文明：メキシコ、アンデス文明：ペルー）の一端を覗いてきました。

成田を午後4時半に発ち、メキシコシティに着いたのが午後2時、時差15時間を考慮すると12時間半のフライトでした。熱帯雨林気候のメキシコシティは、乾期であったことや標高2,250mの高地のため過ごし易いと思いきや、思っていた以上に日差しが強く痛く感じられました。

翌日、目的の一つ「世界遺産：テオティワカン遺跡」に足を運びました。現在発掘されているテオティワカン遺跡は四方約2kmの広大な遺跡でした。この遺跡で1番大きな「太陽のピラミッド」は、底辺225m×225m、高さ65m、248段ある宗教儀礼の場で、世界で3番目に大きなピラミッドです（1位エジプト：クフ王のピラミッド、2位エジプト：カフラー王のピラミッド）。



(1) テオティワカン遺跡中心部の地図

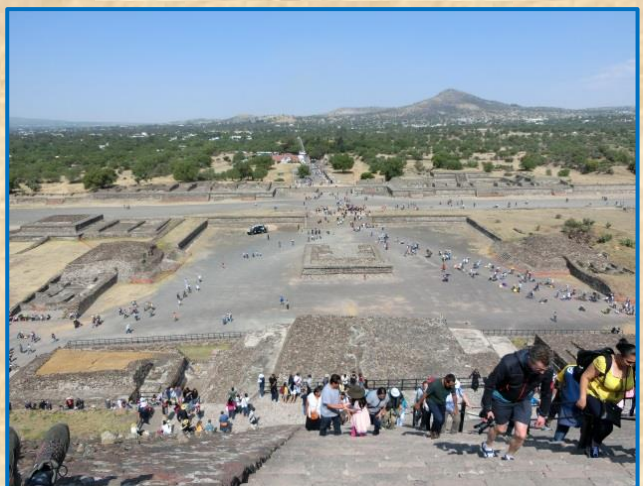
太陽が「太陽のピラミッド」の真上に来る5月19日と7月25日には、太陽のピラミッドの正面の延長上に太陽が沈むことで有名です。太陽のピラミッドから約600m離れたところに「月のピラミッド」があります。両ピラミッドとも頂上まで登ることができますが、勾配がきつく1段の高さが約30cmと高いので脚力を要し這って登る人もいました。必死の思いで登った頂上からの眺めは、周囲に山がなく360°の大パノラマで、その広さに驚き、まだ埋もれた遺跡があることを予感しました。なお、テオティワカンとはアステカ人の言葉で「神々の都」を意味するとのことでした。この遺跡はAC.100頃造られ、最盛期のAC.350～AC.650頃の人口は10万人～20万人と推定されています。



(2) 「死者の道」から月のピラミッドを望む

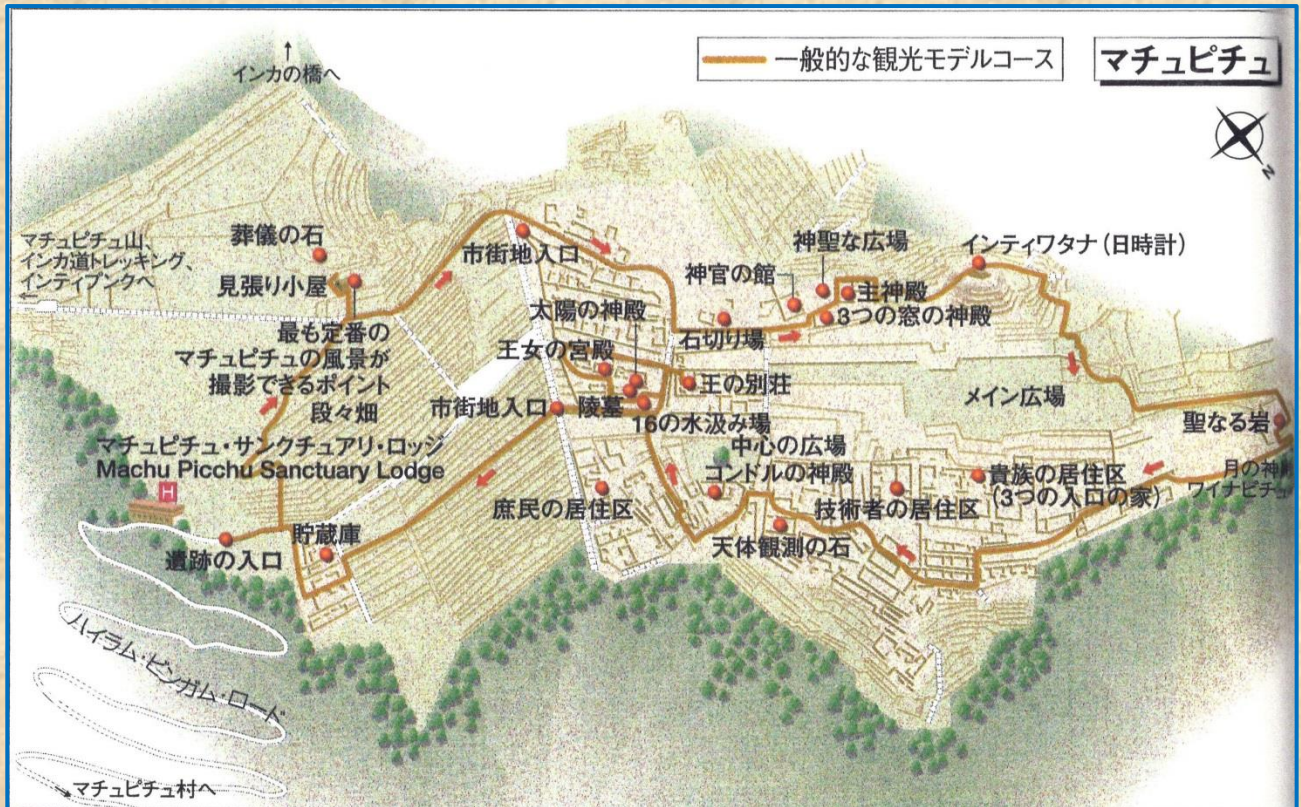


(3) 月のピラミッドから「死者の道」を望む
(左奥が太陽のピラミッド)



(4) 太陽のピラミッドに登る人々

翌日ペルー（リマ空港）へ、そして国内線でクスコへ、そしてバスでウルバンバへ。ウルバンバ泊後、バスと列車でマチュピチュ村に向かいました。



(5) マチュピチュ遺跡中心部の地図

マチュピチュ村から遺跡までは小型バスで30分弱の山道ですが、その間は未舗装で狭く、すれ違いが困難な箇所があり待機することがありました。到着後、遺跡までは歩いて10分ほど。天気は晴れ。やや雲有でしたが絶好の観光日和。想像と



(6) 遺跡はマチュピチュ村よりバスで30分
(正面の谷間を進む)

期待に胸を膨らませ息を切らしてたどり着いたビューポイント、遺跡を眼下にした時の絶景に暫く声が出ず、シャッターを押すのも忘れるほど感動したものです。遺跡は神殿・宮殿や住居区および広場などで構成され、遺跡の約半分を占める畑はそのほとんどが斜面にあり段々畑となっていました。



(7) 遺跡およびワイナピチュを望む

14世紀中頃に造られ500人～
1,000人が暮らしていたと言われ
ているマチュピチュ遺跡。マチュ
ピチュ(老いた峰：2,900m)とワイ
ナピチュ(若い峰：2,700m)とを
結ぶ断崖絶壁の尾根の上に築か



(8) ワイナピチュに登る人々(1日400人と制限されている)

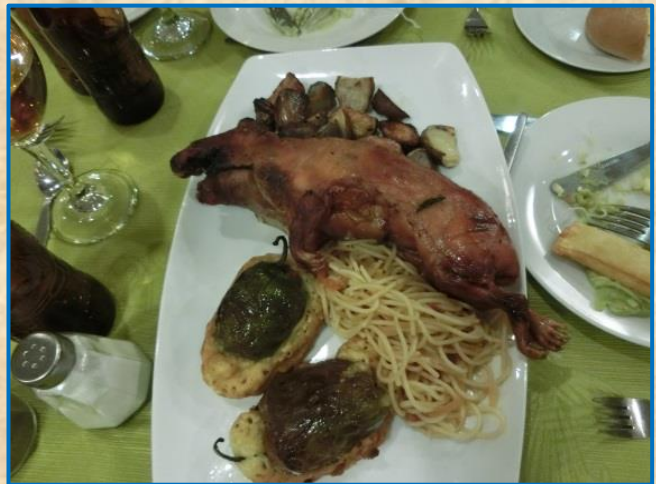
れた石造建造物。文字や物を運ぶ車輪を持たなかった当時、誰が、何のため
に、この標高の高い山中に…。インカ帝国の伝説の都、または難攻不落の砦、
または王族や貴族などの避暑地、または重要な宗教施設?、と諸説様々。天
空の都市：マチュピチュ遺跡は、新・世界七不思議の1つに選ばれている未
だ解明されていない謎に満ちた遺跡でした。

この遺跡が「マチュピチュ」と呼ばれるようになったのは、1911年に調査のためこの地を訪れたアメリカの歴史学者ハイラム・ビンガムがインカの遺跡の存在を尋ねたところ、農夫がマチュピチュ（老いた峰）の方向を指したことが



(9) 遺跡に向かう途中の空中ホテル
(断崖絶壁を登って入室、予約多数)

「遺跡＝マチュピチュ」になったと言われています。勿論マチュピチュ・ワイナピチュの両峰とも頂上に至る各所に遺跡が残っています。両峰とも登ることができますが、ワイナピチュは1日400人と制限されています。



(10) 最高級肉料理（食用ねずみ、牛・豚・鶏肉より割高）

今回の旅行は、世界で最も人気のある世界遺産をこの目で観ることができ、ワクワク感と、あまり興味を示さない妻を説得してのやや気になる出発でしたが、観光中の妻の表情の変化と、弾む会話に安堵し、記憶に残る旅行になったことが何よりでした。